

宗祖遺文に於ける菩提心についての一考察

株橋隆真

一 問題の所在

「発菩提心 道心堅固 慈悲廣大 不受重病 転受軽受 臨終正念 浄土参拝 所願成就 皆令満足 如説修行 弘通弘宣 真俗円満」という日隆聖人(二三八五—一四六四)の願文の初頭に「発菩提心」の語があるように、法華宗徒をはじめ仏教徒にとってこれは成仏を目指すのに重要な要件であることはいうまでもない。

しかしながら、宗祖遺文において菩提心について管見の限り体系的・論理的に説明されている箇所は見当たらない。当然宗祖にとっても成仏の要因であることには変わりないであろうが、何故詳細な解説に及ばなかったのであろうか。

このことについて、私なりに少しく考察を加えつつ説明してゆきたいと思う。

二 天台に於ける菩提心について

天台大師に於ける菩提心に対する記述は体系的且つ詳細を極めている。

『摩訶止観』の五略の發大心や十乘觀法の起慈悲心に詳説されるが、例えば、

今は則ち毒に非ず偽に非ず、故に名けて真となす。空邊に非ず有邊に非ず、故に名けて正となす。鳥の空を飛て終に空に住せず。空に住せずと雖も跡尋ぬべからざるが如し。空と雖も而も度す、度すと雖も而も空なり。是故に誓て虚空と共に闢うと名く。故に眞正發菩提心と名く。^①

とあり、衆生と煩惱は毒でもなく偽でもないので「真」と名付け、また空に偏つたものでもなく有に偏つたものでもないので「正」と名付ける。それは鳥が空中を飛んでも空中に住して行跡を尋ねることもできないようなものである。しかしそうであっても濟度しなければならぬし、濟度したとしても空であり虚空とともに闢わなければならないとして、天台では「眞正發菩提心」と名付けるとしている。

また、「止観」ではこの眞正發菩提心を「起慈悲心」と呼び、その理由を次のように述べている。

此の如きの慈悲誓願と不可思議の境智とは、前に非ず後に非ず同時に俱に起る。慈悲は即ち智慧、智慧は即ち慈悲、無縁無念にして普く一切を覆い、任運に苦を抜き、自然に樂を与う。毒害に同じからず、但空に同じからず、愛見に同じからず。是れを眞正發心菩提の義と名付く。^②

すなわち、このような慈悲誓願と不可思議の境智は前後なく同時に起こるものであり、慈悲は智慧であり智慧は慈悲である。分別智によるものではなく無縁・無念であり、一切を覆い尽くし、任運自在に苦を抜き樂を与える

のである。それは毒害でもなく、但空でもなく、愛見でもない。これを「真正發菩提」の義としている。

この誓願と智慧を追慕するのが真正發心であり、しかもそれは自利だけではなく、利他の精神に則らなければならぬとしているのであり、そのことを「四念処」では、

真正というは、無行經に云く若し發心して菩提を求めば、この人の仏を去ること遠きこと、譬えば天と地との如し。蓋し三方便菩提心を發すを指すなり。これすなわち菩提心魔なり。^③

といい、自利利他を備えた菩薩行でなければ、その發心は魔となつてしまふとまで言及している。

以上のように天台では、空有・前後に偏らない大乘思想に基づく「上求菩提 下化衆生」發菩提心を真正發心とし、それではなければ菩提心魔とまで表現し指摘しているのである。

さらに、天台独自である円教の修道上の階位を示す六即に基づいて菩提心を説明し、特に名字即については、

名字即とは、理は即ち是なりと雖も日に用いて知らず。未だ三諦を聞かざるをもつて全く佛法を識らず。牛羊の眼の方隅を解さざるが如し。或は知識に従い、或は經卷に従いて、上に説く所の一実の菩提を聞き、名字の中に於て通達解了して、一切の法は皆是仏法なりと知る。是れを名字即の菩提となす。亦た是れ名字の止觀なり。^④

と説き、円教の名字即位の行者は、「或從知識、或從經卷」して解了し、次位へと転入して究竟即へ通達すると

いう、重要且つ実践的な道程を示している。

そしてそもそもこの発心は、

問う、行者自ら発心するや、他、教えて発心せしむるや。答う、自、他、共、離、皆不可なり。但だ是れ感
応道交して而も発心を論ずるのみ。

として、自発的でも他発的でもなく、仏と衆生の感應道交においてのみ存在するとしており、天台の発心に対す
る最も特徴的な認識と言えよう。

三 宗祖遺文に於ける菩提心について

宗祖遺文中に於いて菩提心についての記述は散見するが、前述のように体系的・論理的に詳述されている箇所
は、管見の限り見出せない。

しかしながら、菩提心についてのいくつかの用例を内容によって分類してみる。

①現在の法華信仰は過去の菩提心の縁によるとするもの

「守護国家論」

問うて云く、過去の宿善とは如何。答えて曰く、法華經の第二に云く、「もしこの經法を信受することあら

ん者は、この人はすでに曾て過去の仏を見たてまつり、恭敬し供養し、またこの法を聞けるなり」と。法師品に云く、「また如来の滅度の後、もし人ありて妙法華經の乃至一偈一句を聞いて、一念も随喜せん者には、乃至、まさに知るべし、この諸人等はすでに曾て十萬億の仏を供養せしなり」と。流通の涅槃經に云く、「もし衆生ありて、熙連河沙等の諸仏において菩提心を發し、すなわち能くこの惡世において、かくのごとき經典を受持して誹謗を生ぜず。善男子、もし能く一恒河沙等の諸仏世尊において、菩提心を發すことありて、しかして後に、すなわち能く惡世の中においてこの法を謗せず、この典を愛敬せん」と。これらの文のごとくんば、たといまず解心なくとも、この法華經を聞いて謗せざるは大善の所生なり。それ三惡の生を受くること大地微塵より多く、人間の生を受くること爪の上の土より少なし。乃至、四十余年の諸經に値うは大地微塵より多く、法華・涅槃に値うことは爪の上の土より少なし。上に挙ぐる所の涅槃經の三十三の文を見るべし。たとい一字一句なりといえども、この經を信ずるは宿縁多幸なり。

これによると、熙連河や恒河の砂の数ほどの仏に供養して發心した者は、惡世に生まれても正法を謗らず愛し敬うであろうと涅槃經に説かれている。このようにたとえ法華經の經説内容を理解できなくてもこの經を聞き信じることがないのは、過去の大善によるものであるとし、爪上の土よりも少ない確率で人身に生まれ法華經に出会い、たとえわずか一字一句でも信じる事が出来るのは、宿縁であり幸多いことであるとするのである。

②菩提心の本質を説明的に述べているもの

【爾前二乘菩薩不作仏事】

宗祖遺文に於ける菩提心についての一考察（株橋隆真）

五種の功德とは一には正勤・二には恭敬・三には般若・四には闍那・五には大悲なり。生ずること無しと疑うが故に菩提心を発すことあたわざるを下劣心と名け、我に性有つてよく菩提心を発すと謂えるを高慢と名け、一切の法無我の中において有我の執を作すを虚妄執と名け、一切諸法の清淨の智慧巧徳を違謗するを謗真法と名け、意ただ己を存して一切衆生を憐むことを欲せざるを起我執と名く。この五に翻対して定めて性有りと知りて菩提心を発すと。⁷⁾

ここでは、正勤・恭敬・般若・闍那・大悲の五種の功德に反して、下劣心・高慢・虚妄執・謗真法・起我執の五種の過が失生しても、これらを翻してもとより仏性があることを知り菩提心を発すべきであると示されている。

③ 宗祖自らの発心と忍難弘通の覚悟について述べられているもの

【開目抄】

日本国にこれをしれる者、ただ日蓮一人なり。これを一言も申し出ずならば父母・兄弟・師匠に国主の王難必ず来るべし。いわずば慈悲なきにたりと思惟するに、法華経・涅槃経等にこの二辺を合せ見るに、いわずわ今生は事なくとも、後生は必ず無間地獄に墮べし。いうならば三障四魔必ず競い起るべしとしぬ。二辺の中にはいふべし。王難等出来の時は退転すべくは一度に思い止むべし、と且くやすらいし程に、宝塔品の六難九易これなり。われら程の小力の者須弥山はなぐとも、われら程の無通の者乾草を負て劫火にはやけずとも、われら程の無智の者恒沙の経々をばよみをほうとも、法華経は一句一偈も末代に持ちがたと、とかる、はこれなるべし。今度強盛の菩提心ををこして退転せじと願しぬ。⁸⁾

「法蓮抄」

問ふ。然者經文に相違する事如何。答ふ。法華經を怨む人に二人あり。一人は先生に善根ありて、今生に縁を求めて菩提心を發して、仏になるべき者は或いは口閉じ、或いは頭破る。一人は先生に誇人も、生に生に無間地獄の業を成就せる者あり。是れはのれども「口則閉塞」せず。譬へば、獄に入つて死罪に定まる者は、獄の中にて何なる僻事あれども、死罪を行ふまでにて別の失なし。ゆりぬべき者は、獄中に僻事あれば、これをいましむるが如し。

「一谷入道御書」

日本国は仏法盛なるやうなれども、仏法について不思議あり。人は是れを知らず。譬へば虫の火に入り、鳥の蛇の口に入るが如し。真言師・華嚴宗・法相・三論・禪宗・淨土宗・律宗等の人々は、我も法をえたり、我も生死をはなれなんとはをもへども、立てはじめし本師等依經の心をわきまへず、但我心のをもひつきてありしまゝに、その經をとりたてんとをもうはかなき心ばかりにて、法華經にそむけば仏意に叶はざる事をばしらずしてひろめゆくほどに、国主万民これを信じぬ。又他國へわたりぬ。又年もひさしくなりぬ。末々の學者等は本師のあやまりをばしらずして、師のごとくひろめならう人々を智者とはをもへり。源とにこりぬればながれきよからず、身まがればかげなをからず。真言の元祖善無畏等はすでに地獄に墮ちぬべかりしが、或いは改悔して地獄を脱れたる者もあり、或いは只依經計りをひろめて法華經の讚歎をもせざれば、生死は離れねども「惡道に墮ちざる」人もあり。而るを末々の者此の事を知らずして諸人一同に信をなしぬ。譬へば破れたる船に乗りて大海に浮び、酒に酔へる者の火の中に臥せるが如し。

日蓮是れを見し故に、忽ちに菩提心を発して此の事を申し始めし也。世間の人々に申すとも信ずることはあるべからず。かへりて死罪流罪となるべしとはかねて知てありしかども、今の日本国は法華経をそむき釈迦仏をすつるゆへに、後生に阿鼻大城に墮つことはさてをきぬ。今生に必ず大難に値ふべし。所謂他国よりせめきたりて、上一人より下万民に至るまで一同の歎きあるべし。譬へば千人の兄弟が一人の親を殺したらんに、此の罪を千に分けては受くべからず。一々に皆無間大城に墮ちて同じく一劫を経べし。此の国も又々かくのごとし。^⑩

「撰時抄」

今度命をおしむならば、いつの世にか仏になるべき、又何なる世にか父母師匠をもすくひ奉るべきと、ひとへにをもひ切りて申し始めしかば、案にたがはず、或は所をおひ、或はのり、或はうたれ、或は疵をかうふるほどに、去ぬる弘長元年辛酉五月十二日に御勘氣をかうふりて、伊豆国伊東にながされぬ。又同じき弘長三年癸亥二月二十二日にゆりぬ。

其後弥菩提心強盛にして申せば、いよいよ大難かさなる事、大風に大波の起るがごとし。昔の不輕菩薩の杖木のせめも我身につみしられたり。覚徳比丘が歎喜仏の末の大難も此には及ばじとをほゆ。日本六十六箇国嶋二の中に一日片時も何れの所にすむべきやうもなし。古は二百五十戒を持ちて忍辱なる事羅云のごとくなる持戒の聖人も、富樓那のごとくなる智者も、日蓮に値いぬれば悪口をはく。正直にして魏徴・忠仁公のごとくなる賢者等も、日蓮を見ては理をまげて非とをこなう。いわうや世間の常の人々は犬のさるをみたるがごとく、獵師が鹿をこめたるににたり。^⑪

これらによると、当時の日本は表面的には仏法が盛んであるような様相を呈しているけれども、内実は正法に対する謗法が充滿し、今生では大難に遭い、後生では阿鼻地獄に墮すること必定である。このような現状認識のもと、宗祖は直ちに菩提心を起こして真実の仏教を説き弘め始めたが、世間の人々は信じようとはせず、そればかりか宗祖を流罪や死罪に科せようと迫害の勢いを増してきたのである。そのようなことはすでに覚悟の上ではあるが、末法の時代に法華經の一偈一句をも持つことは非常に困難を極めることを、六難九易の經説の如く痛切に体験された。しかしながら、ただ日蓮一人のみこのことを知り、濁惡末世に正法弘通できるのであるから、強盛の菩提心を起こそうと誓願される決意を表明されている。

言い換えると、大乘の精神に基づく自利利他の菩提心を末法の現実に具現化させるには余りもの多大な障害を乗り越えなければならないが、末法の衆生の悲痛な現状を目の当たりにして、末法下種によって衆生を濟度せずにはいられないという、慈悲心による真の菩薩行を決意され実行されたことが計り知れるのであり、これが末法においては真正の菩提心の決定であり相貌であるといえるであろう。

従つて宗祖にとつては、理論的に発心を教示することよりも、實際的な日蓮一人の発心を標榜することが先決であり、結果的にそこに主眼が置かれることになつていったのではないだろうか。

四 日隆聖人の發心義について

上述のように宗祖遺文においては、菩提心は体系的・論理的には詳述されていないので、日隆聖人（以下、隆師）の指南によつてその意味内容を考へてみたい。

隆師の御聖教中に菩提心についての記述は処々に見られ、就中「開迹顕本宗要集」に最も詳しく論じられている。

まず発心の定義についてみると、

発心とは下種なり。末代は本未有善の衆生なる故に下種の機なり。故に名字の位に居せしむるなり。⁽¹²⁾

発心とは下種なり。下種は権乘に亘らず。故に「余経を以て種となさず」と云ふ。発心も四教に亘ると雖も、真実は円乘にあり。円乘においても爾前迹中の諸円に有るにあらず。久遠本地の円にあり。故に観心本尊抄に、一品二半よりの外は小乗教・邪教・未得道教・覆相教と名づく。乃至、爾前迹門の円教すら尚を仏因にあらず云云。仏因とは発心下種なり。故に発心下種は本有として久遠本因妙名字信位にあり。⁽¹³⁾

とあり、発心とは下種であるとし、それは「久遠本地の円」の久遠下種に他ならず、故に宗祖は「本尊抄」で「一品二半よりの外は小乗教・邪教・未得道教・覆相教と名づく。乃至、爾前迹門の円教すら尚を仏因にあらず」と示されているのであり、それを受けて「仏因とは発心下種なり」と定義付けられている。

またその下種の機は、「止観輔行伝弘決」（以下「輔行」）の「今発心を明かすに名字の位に在り」とか「実に依つて発心せば能く諸仏を生ず。名付けて仏種となす」とある⁽¹⁴⁾によって、発心とは下種でありその位は名字即であるとする。この発心の位については天台も当家も異議がない⁽¹⁵⁾としている。

しかし位は同じでも迹門・本門において心地に違いがあるとして、

抑も天台宗の意は、発心とは六即の中には名字即なり。弘の一に云く、今、発心を明かさば名字位に在り云云。又止の一に、あるいは智識に従い、あるいは経巻に従いて上に説く所の一実菩提を聞き、名字の中において通達解了して一切法皆是れ仏法なりと知る云云。此の名字において迹本の名字これあり。随つて迹本の発心これあり。迹門の意は從因至果する故に発心を下し信行を下し、解行を崇めて法行を敬ぶ。故に境母は常住・智父は無常の所依常の三諦を以て所発の境となし、「或從智識或從經卷」して「知一切法皆是れ仏法」と通達し、心地に解了して悉く起念の悪を絶し、初めて己心本不生の心源を見て即ち大悲心を発す。此れを妙解發菩提心の心地と名づく。故に迹門流通・四安樂行・止觀一部の意は信解行証の中に信を下して解行を取り、しかも妙解を以て方便となし、觀行即の妙行を以て正旨となす。故に前六重の妙解名字の発心と云ふも、信を去りて解を取る通達解了の後心の名字なる故に、只是れ觀行五品の初隨喜品に名字即の名を与ふる高尚の者・高尚の妙解發菩提心なる間、智者解行の発心なり。正像の時機などには相当する発心なり。是れ下種の発心にあらず。且く熟益に発心の名を与ふるなり。故に末代の為には過時發心なり。⁽¹⁷⁾

と、「迹門の意は從因至果する故に発心を下し信行を下し、解行を崇めて法行を敬ぶ」から同じ名字即であつても信より解を選ぶので、智者解了の発心であるという。

これに対して本門の意は、

本門の意は「教弥実位弥下」して從果向因の六即の觀位を明かす故に、本因妙名字信行の発心を以て六即一即の本位となし、一念信解の信行を明かし不輕の先証を以て本因妙上行に付す。上行は是れ本有本因の菩薩

界にして十法界初發菩提心の教主なり。慈父なり。能生なり。⁽¹⁸⁾

とあり、「教弥実位弥下」して従果回因の六即の觀位を明かすので本因妙名字信行の發心を以て六即一即の本位とし、これは、

六即一即と云ふは名字の一即なり。諸行の根本とは信行なり。諸仏・諸菩薩能生の慈父とは本因妙一念信解の信心なり。此の信行をば上行に付し、余の法行をば迹化他方の諸菩薩に付す。故に本門八品には本因妙名字信行を明かし、滅後末法初發菩提心の下種に備ふるなり。御抄に云く、迹門より本門は下機を損す、教弥実位弥下等と判じたまえり。⁽¹⁹⁾

として、「四信五品抄」に、

また一念信解の四字の中の信の一字は四信の初に居し、解の一字は後の奪わるる故なり。もししからば無解有信は四信の初位に当る。經に第二信を説て云く、「略して言趣を解す」と云云。記の九に云く、「ただ初信を除く、解なきが故に」。随て次ぎ下の随喜品に至て、上の初隨喜を重てこれを分明にす。五十人これ皆展転劣なり。第五十人に至て二釈あり。一にはいわく、第五十人は初隨喜の内なり。二にはいわく、第五十人は初隨喜の外なりと云うは名字即なり。「教弥実なれば位弥下れり」と云う釈はこの意なり。⁽²⁰⁾

冒誹謗を致して杖木瓦石を加へ、「数々見擯出遠離於搭寺」の大難を蒙る事は、権迹を簡び実本を取りて発菩提心の信行を勧むる故なり。故に発心と云ふ实体は折伏なり。²³

とあつて、本仏の行因の証人として不輕菩薩を出し、名字信行の発心の心地は折伏であるとし、だからこそ大慈大悲を起こして順逆の兩縁の下種を成じ、一分の慧解がなくとも大非心をもつて折伏をなす最上の発心が結するところのである。

以上のように隆師は、宗祖の教示に従つて解說的説明を施し、宗祖遺文中の他の教義的指摘との整合性を持たせている。このことは隆師の御聖教全体の一貫した姿勢であることは言うまでもなく、教学上門下として決して看過できないことである。

五 まとめ

天台以来菩提心は、自利利他の原則に則つた名字即の位において感應道交によつて成り立つものという伝統的な理論的解釈であつたが、宗祖の菩提心義は、更にその上に實際的な折伏弘通によつて実証され確立したのではなからうか。何故なら、

目連尊者が法華経信まいらせし大善は、我が身仏になるのみならず、父母仏になり給。上七代下七代、上無量生下無量生の父母等存外に仏となり給。乃至子息・夫妻・所従・檀那・無量衆生三惡道をはなる、のみな

らず、皆初住・妙覚の仏となりぬ。故に法華經第三云願以此功德普及於一切我等与衆生皆共成仏道云云。⁽²⁵⁾

と示されるように、自利利他の精神に立脚した慈悲心を前提に、「日蓮一人」と表現される末法の「法華經の行者」としての使命感があるように思われるからである。例えば、

されば日本国の持経者はいまだ此經文にはあわせ給はず。唯日蓮一人こそよみはべれ。我不愛身命但惜無上道是也。されば日蓮は日本第一の法華經の行者也。もしさきにたたせ給はば、梵天・帝釈・四大天王・閻魔王等にも申させ給べし、日本第一の法華經の行者日蓮房の弟子也、となのらせ給へ。よもはうしん(芳心)なき事は候はじ。⁽²⁶⁾

と、末法の現在に於ける持経者は「唯日蓮一人」という自覚の許に表された「日蓮一人」であり、そのことを、

末法に入ては此日本国には当時は日蓮一人みへ候か。⁽²⁷⁾

末法の始のしるし、恐怖悪世中の金言のあふゆへに、但日蓮一人これをよめり。⁽²⁸⁾

等と示されている。

つまりそこには「唯我一人のみ能く救護をなす⁽²⁹⁾」という如来使としての強固な決意と同時に、「我が身仏にな

るのみならず」という慈悲にあふれる利他行の使命感があり、これらが宗祖を衝き動かさせていた原動力になっていたのである。

しかもまた、感応道交によってのみ菩提心が結実するので、それが本地本門の経力に依って発するという譬喩を、

濁水心なけれども、月を得て自ら清り。草木雨を得てあに覚あつて花さくならんや。妙法蓮華經の五字は經文にあらず、その義にあらず、ただ一部の意のみ。初心の行者その心を知らざれども、しかもこれを行ずるに、自然に意に当るなり。⁽²⁰⁾

と表現し、菩提心に対する詳細な説明はなくとも、ここに究極的に発心下種の境地が教示されていると思われる。このことは、

この教より信を生ず。信と教と合して下種を成ず。⁽²¹⁾

この教信とは、或いは知識に従い、或いは經卷に従う、の南無妙法蓮華經これなり。⁽²²⁾

等という、これらの隆師の「教信」という指南によってさらに明らかになるのではないだろうか。

以上、浅学管見ながら宗祖の菩提心について考察を試みたが、今後更に解明しなければならない問題点につい

て、取り組んでいきたい所存である。

注

- (1) 「摩訶止観」五上(正蔵四六一五六a)
- (2) 同 (正蔵四六一五六b)
- (3) 「四念処」四(正蔵四六一五七五a)
- (4) 「摩訶止観」一下(正蔵四六一一〇b)
- (5) 同 一上(正蔵四六一四c)
- (6) 定遺 一二八 正元一 身延曾存
- (7) 定遺 一四七 正元一
- (8) 定遺 五五七 文永九 身延曾存
- (9) 定遺 九五六 建治一 身延曾存 断真
- (10) 定遺 九九〇 建治一 断真
- (11) 定遺 一二三七 建治一 真存
- (12) 「法華天台兩宗勝劣抄」三 法全一 一八〇 以下「四帖抄」
- (13) 「開迹顯本宗要集」仏部七 隆教一二四二 以下「宗要集」
- (14) 「輔行」一ノ五 正蔵四六一一七九a
- (15) 同 正蔵四六一一七七a
- (16) 「位に約して下種を論ぜば、天台・当家に異議なし」「四帖抄」三 法全一 一九九

- (17) 『宗要集』 仏部七 隆教一 一三九、四〇
- (18) 『宗要集』 仏部七 隆教一 二四〇
- (19) 『宗要集』 仏部七 隆教一 二四〇
- (20) 定遺 一二九五 建治三 真存
- (21) 『宗要集』 仏部七 隆教一 二四一
- (22) 同 二四五
- (23) 『曾谷入道殿許御書』 定遺 八九六 文永十二 真存
- (24) 『宗要集』 仏部七 隆教一 二四二、三
- (25) 『孟蘭盆御書』 (定遺 一七七五 弘安三 真存)
- (26) 『南条兵衛七郎御書』 (定遺 三二七 文永一 真存)
- (27) 『転重軽受法門』 (定遺 五〇八 文永八 真存)
- (28) 『開目抄』 (定遺 五五九 文永九 曾存)
- (29) 『妙法蓮華経』 譬喩品第三 (正蔵九一、一四c)
- (30) 『四信五品抄』 (定遺 一二九八 建治三 真存)
- (31) 『四帖抄』 一 法全一 四二、三
- (32) 同 四三